

梵舜本『沙石集』の本文表現と編者

一、無住『沙石集』本文と梵舜本『沙石集』本文

無住道暎一円が著した『沙石集』には、多くの異本が現存している。『沙石集』異本成立には、『沙石集』編纂時の「草案」「弘安六年本」から数度の改稿という無住自身の『沙石集』に対する「情熱」と「迷い」の痕跡を切り離すことはできない。同時に忘れてはならないのは、無住自身が「有心ノ人、此志ヲ助テ、アヤマリヲタバシナラシ、尚モ書継キ給テ」と述べているように、後世の享受の過程における改変の可能性である。そういった様々な成立要素が絡み合う中で、『沙石集』諸本関係を探る第一の手掛かりとなつてくるのが、御茶ノ水図書館蔵成實堂文庫旧蔵梵舜本『沙石集』（以後、梵舜本）の位置づけである。かつて渡邊綱也氏は、梵舜本を「無住がしばしば述べている「草案」のまま洛陽に披露した書の面影を、

加 美 甲 多

伝えたもの^①と規定され、以後この説が『沙石集』草稿本についての見解の大勢を占めてきた。それに対して、近年には渡邊氏の梵舜本「草案」説とは異なる見解が土屋有里子氏によつて打ち出された^②。これは小島孝之氏が「梵舜本が本文的には古本系統の諸本よりも流布本系統に近い本文を持っている点から考えると、古本から流布本が成立してくる途中のある段階で、こうした説経説話が多量に増補されたテキストだったと考えることも可能である^③」と述べられたことを受けて、考察されたものである。土屋氏は、梵舜本が『沙石集』の草稿本ではないという可能性について初めて具体的な考察を加えられている。

これらのご高察を踏まえて、以前、梵舜本を中心とした『沙石集』諸本本文について調査を行った^④。その結果、梵舜本は古本系統に属しているが本文は流布本系統に近く、流布本系統にも見られな

い本文付加から、現存の梵舜本の形は流布本系統以後の完成も視野に入れるべきであり、流布本系統から最も遠い本文を有する市立米沢図書館蔵興譲館旧蔵本『沙石集』（以後、米沢本）が『沙石集』草稿本である可能性が高いことや、無住の話末評語と梵舜本話末評語との方向性の齟齬から梵舜本は無住自身の改稿本とも考え難いのではないかといった点について述べた。

そこで本稿では、その点をより明確にするために、本文レベルにおいても異同がほとんど認められない現存諸本に一致する『沙石集』説話や『雑談集』説話を無住自身の手になる本文と考え、他作品の同話や類話との比較から無住の本文表現の特徴を明らかにしたい。その上で、それが梵舜本独自説話の本文表現と一致するものなのか、もしくは齟齬しないものなのかを探りたい。そうすることに よって、梵舜本本文、特に巻第六や第八の独自説話が無住の『沙石集』改稿作業の一環における「産物」なのか、後世の享受の過程における改変者（達）の改稿によって形成された可能性が高いのかを見極める一つの手掛かりとしたい。

二、無住の本文表現

1、『沙石集』諸本共通説話

— 卷第三（二）「問注ニ我ト劣タル人事」—

出典が明記されている『沙石集』諸本共通説話の一つに卷第三（二）「問注ニ我ト劣タル人事」における「人ノ髻」の寓話が挙げられる。この説話は無住が『百句譬喩経』「唵米決口喩」に特徴的な本文付加を行っている点で、『沙石集』の本文表現を探る第一の手掛かりと言える。また、「人ノ髻」の寓話は、『沙石集』より成立年代が下る可能性が高い『直談因縁集』（現存本、天正十三（一五八五）年書写）にも受け継がれるが、『沙石集』と『直談因縁集』には多くの類話を見出せることから、『沙石集』と『直談因縁集』とを比較することも『沙石集』の本文表現を知る上で重要な作業となってくる。従って本稿では、次に『百句譬喩経』「唵米決口喩」、『沙石集』巻第三（二）「問注ニ我ト劣タル人事」における「人ノ髻」の寓話、『直談因縁集』八一四五の全文を挙げる。^⑤

『百句譬喩経』第四卷「唵米決口喩」

昔有二人至婦人家舍。見其擣米。便往其所。偷米噉之。

婦来見。夫欲共其語。満口中米都不応和。羞其婦。故不肯

棄_レ之是以不_レ語。婦怪不_レ語以_レ手模看謂_レ其口腫。語_レ其父_二言

我夫始來。卒得_二口腫_一都不_レ能語。其父即便喚_レ医治_レ之。時医

言曰此病最重。以_レ刀決之可_レ得_レ差耳。即便以_レ刀決_レ破其口_一。

米從_レ中出其事彰露。

『沙石集』卷第三(二)「問注ニ我ト劣タル人事」

百喻經云、昔シヲロカナル俗アリテ、人ノ聾ニナリテ往ヌ。

サマ_レモテナシケレドモ、ナマコザカシクヨシバミテ、イト
物モクワデ、ウヘテヲボヘケルマ、ニ、妻ガ白地ニ立出タルヒ
マニ、米ヲ一ホウ打ククミ、クワムトスル所ニ、妻婦リタリケ
レバ、ハヅカシサニ面ヲウチアカメテイタリ。ホウノハレテ見
ヘケレバ、「イカニ」ト問ドモ音モセズ。彌カホアカミケレバ、
「ハレ物ノ大事ニテ、物モイハヌニヤ」トテ、ヲドロキテ、父
母ニカクト云ヘバ、父母來テ見テ、「イカニ_レト云。彌色モ
赤クナルヲ見、隣ノ物アツマリテ、「聾殿ノハレ物、大事ニヲ
ハスルナル。淺猿」トテ訪フ。サル程ニ、医者ヲヨブベキニテ、
藪クスシノ、近々ニアリケルヲ、ヨビテ見スレバ、「ユ、シキ
御大事ノ物ナリ。トク_レ療治シマイラセム」トテ、火針ヲ赤
ク焼テ、頬ヲトヲシタレバ、米ノホロ_レトコボレテケリ。ホ
ウハ破レ、恥ガマシカリケリ。(傍線は稿者による、以下の引

用も同じ)

『直談因縁集』八一四五

付_テ懺悔。是ハ常ニ三才ノカイ人迄語樣_レトモ、其意無_ニ非_ス。聾

セウト入_リヲ成_ス。妻ノ女房ヲモ、同道_ニ至_ル也。而_ルニ、此男、家_テハ

自_レ元大食_{ナレ}ハ、何_ヲモ心_ニ任_ニ食_ス。サレトモ、ハナ聾_ト云_{ナレ}ハ、

食_ヲモ意_任ニ不_レ致_ス。去程_ニ、竭_ニ及_リ。時、地下ノ事_ハ、一間所_ヲ見_ハ、

白米_ヲ用意_シ置_キ。是_ヲツカミ、口_ニ十分_ニク、メリ。時、妻ノ女房、

何_ト無_ク來_テ物語_セト思_フ、至_ニ、見、面_ヲ赤_シテ、恥カシク思_フ也。サ

レハ、物不_レ云、自_レ鼻_ノ息_ヲ出_シ居_リ。時、女房、急婦_リ、父母_ニ

對_シテ、如此_ト云云。サレハ、人数多_ク來_テ見_之。是_ハ大切_也。大事ノ病

也、サテ死_シル歟、ト託事_ス。乍去、医師_ヲ召_テ見_ルニ、是_ハ赤_クスキ

〈_ト瘡_ル故_ニ、只先、針_ヲ指_テ見_ト、云云。尤_ト云_テ、四方_ヲサヘ

ナトシテ、針_ヲ立_ル也。時、針_ヲ目_{ヨリ}、米_カホロ_レト落_ル也。サレ

ハ、天下_ニ無_ク陰_ハ恥辱_ヲ□也。是_ハ、尤_モ妻_{ナレ}ハ不_レ苦_故、如此_ト云

ン、陰_ヲ如此_ト恥_ヲ云云。如是、對_レ人、對_レ僧、向_レ仏、可_ク懺悔_ス也。

不_レ致_ス懺悔_ヲ、惡趣_ニ落_ル事、如此_ト云云。

『百句譬喻經』、『沙石集』と『直談因縁集』との直接的な書写關

係の有無は不明であるが、説話の型としては非常に近く、ほぼ同一

といつても良い。話の発端である「俗」の「智」入り（起）、妻に隠れて米を盗み食う「智」の姿（承）、妻に大事と勘違いされ医者まで登場する（転）、医者によって頬を破られ隠蔽が露顕した「智」（結）といった起承転結に差異は認められない。

しかし、『沙石集』言い換えれば無住の寓話には他には存在しない重要な本文表現が認められる。第一は『沙石集』には「智」の性格や心情が描かれていることである。直接性格に触れない『百句譬諭経』や「自レ元大食」「ハナ智ト云フナ、食ヲモ意任不致」といった前提条件によって認識させてしまう『直談因縁集』とは違い、『沙石集』では「ナマコザカシクヨシバミテ、イト物モクワデ、ウヘテヲボヘケルマ、ニ」と「智」の性格や心情が明記されている。なぜ「智」は米を口いっぱいに入れたかといえは「ウヘテヲボヘケル」状態にありながら「ナマコザカシクヨシバミ」たためなのである。利口ぶって上品そうに振る舞うという行為は一見仏教的な行為にも取れるが、良い子ぶったその偽善的行為が後半に一気に暴露され周囲の見方が逆転するという展開につながり、「智」の行為自体の落差が「智」の性格を規定することによって大きく映し出されるのである。

第二は『沙石集』では「智」の状態、感覚の推移が克明に描かれているということが挙げられる。「智」の状態、感覚に一切言及し

ない『百句譬諭経』や「面ヲ赤シテ、恥カシク思也」という一度の言及に止まる『直談因縁集』とは明らかに違い、「ハツカシサ二面ヲウチアカメテイタリ」「彌カホアカミケレバ」「彌色モ赤クナル」と、無住は克明に執拗なまでに「智」の状態、感覚の推移を描写し、読者への同意確認を行っている。この「人ノ智」の寓話は、裁判中に自ら負けを認めた「正直」で「道理」ある地頭の話の後に配置された地頭とは対照的な「咎ヲモ不レ思隠シ」た好例と言える。罪を罪とも思わずに隠す、また隠せば隠すほど罪は大きくなるという譬諭を説く中で、「智」の状態、感覚の推移を克明に描き、「若罪ヲ隠セバ」隠すほどの部分を強調することによって、「発露懺悔」という行為の重要性を説くのである。本文表現によって「智」の愚かさをより浮き彫りにしている『沙石集』は、同じように「懺悔」を主眼に置いている『直談因縁集』に比して戒めの態度というものが強く感じられるのである。

第三は『沙石集』には「ホウハ破レ、恥ガマシカリケリ」という一文が付加されている。これは無住が「人ノ智」の寓話Ⅱ笑話を載せた意図そのものである。「人ノ智」の寓話の前後に「隠蔽Ⅱ恥Ⅱ罪」の選択をしなかった「道理」ある人々を描く無住にとって、当然「人ノ智」の寓話は「隠蔽Ⅱ恥Ⅱ罪」の反「道理」的な方向性にあるものでなければならない。逆に言えば、「隠蔽Ⅱ恥Ⅱ罪」を説

くために「人ノ聲」の寓話Ⅱ笑話が存在しているのである。そういった意味で無住が「聲」の性格や感覚の推移を描くことは一種の教理的叙述の装置と捉えることが可能なのである。

2、「雑談集」説話 — 第四卷「説法ニハ聴衆ノ有ガ吉事」—
次に無住晩年の著作である『雑談集』と『雑談集』より少し前に成立したほぼ同時代作品である『古今著聞集』の説法における失敗談について、見ていく。次がその全文である。^⑥

『古今著聞集』卷第十六「或僧説法の導師と成り密に約して尼公を泣かしむる事」

或ひらあした名僧ありけり。地を一部主もちたりけり。それ
に人をすへて地子をとり侍けるが、打口一丈あまりに、あるふ
る尼公をすへたり。此僧、或所の仏供養の導師に請ぜられてい
づとて、彼尼公をよびていひけるやうは、「説経のたうとくなく
りぬるは、聴聞の物みな鳴なり。しもおほせぬとは鳴ことなし。
けふの説法に、もし鳴人ならんは、当座のはぢなるべし。わ
尼公、聴聞の砌にす、みて必ず鳴べし。かつは、地殿の公事と
おもふべし」といひふくめていでぬ。此地殿の仰のがれがたく
て、聴聞の志はなけれども、彼仏事の所へゆきぬ。ことよくな

梵舜本『沙石集』の本文表現と編者

りて、導師高座にのぼりて、かね打ならずより、此尼鳴たちた
り。只今説経したる事もなきに、あまりにこと鳴たりければ、
導師、あしく鳴物かなと思て、見かへりてじらりとにらみけれ
ば、尼すくなく鳴とあもひてにらむと心えて、いよく鳴まさ
りけり。導師こはいかにとおもひて、ますくにらみければ、
尼公ほそごゑをいだして、「さも候はずとよ。わづかなる地一
丈あまりが御公事には、これに過てはいかにと鳴候はんぞ」と
いひたりける。人ぐはあとわらひけり。

『雑談集』第四卷「説法ニハ聴衆ノ有ガ吉事」

中比ニ京中ニ、身ハ豊ニシテ貪欲無極、智恵才覚無テ、然
モ又音声ワルク、口モキカズシテアル説法者一人候キ。心請用
ノ不浄説法ハ無隙シケレドモ、人タノム事努力ナカリケル間、
自レ本モチタル物ナレバ、京中ノアキ地ヲ六処カヒテ、六人ノ
尼ヲ語ヒテ、彼ノ地ヲ一ツツ、トラセテ、「我が説法ノ時、必
ズ聴聞ニツラナハリテ、ナキテタベ」ト云ケレバ、六人ノ尼思
フヤウ、心ナラヌネヲバ、何カッナクベキト思ヘドモ、此ノ尼
共ニサセル住処モナクテ、ウカレアリクニナレバ、各一ツツ、
ヌシツキツ。サテカノ僧ノ説法ノ時ハ、必ズ聴聞衆ニ列リテ、
ナキケルニ、或時ノ説法ニ、六人ノ尼ノ中ニ、一人ノ尼、イマ

ダ説法ノ始ナルニ、コトサラ声モヲシマズ、ケタ、マシゲニナキケリ。導師思ヤウ、サイヒタレバトテ、時ヲモシラズ、キゲンモナク、早クナク物カナト思ヒケリ。聴聞ノ人々モ、イカナル事ゾト思テ、目モ心モアキレケリ。或ハ心ニナゲキノ有カト思ヒ、或ハカ、ル説法ノニハヲフム事、今生ノ楽ニアラズト思テナクカト思ヒ、或ハ説法ト思ヘバ、カネタトク覺ル故ニ、ナクカト思ヒ、或ハケシカラズ思テ、ニクム物モアリ、ソシル物モアリケリ。サテ此ノ尼、説法ノナカバ計リニ、ツイ立テ、タカラカニ云ク、「導師ノ御房キコシメシ候へ。尼一人ニイトマタビ候へ。指タル悪事候。カイハゲミテ能クナキテ候ゾ。然モ尼ガ地ハ一ツヘヌシト申ナガラ、ヨノ尼御前タチノ地ヨリモ、ハルカニ少ク候」トイヒテタチヌ。此ノ導師此ノ事ヲ聞クニ、サスガ人ナレバ身ヨリ火ヲイダス。諸人ノキ、ヲラドロカス。是即十悪ノイタス所也。能々慚愧シテ、念仏ヲ可唱云云。

どちらの話も、説法後に泣くことを仕込んだ「サクラ」の尼が説法開始前に泣いてしまい、「導師」の企みが露顕したという類話であるが、『古今著聞集』と比して『雑談集』においても『沙石集』と同様に無住の特徴的な本文表現が認められる。

最初に「説法者」の性格を詳細に規定していることが挙げられる。

『古今著聞集』では「導師」の内面的性格に触れようとしないのに対し、「雑談集」では「説法者」でありながら「身ハ豊ニシテ貪欲無極、智恵才覚無下、然モ又音声ワルク、口モキカズシテアル説法者」であると積極的に人物規定を行っている。本来、仏に仕える身としての「導師」像を明確な性格付けによって打ち壊すことで説話が始まるのである。これは「人ノ聲」の寓話と共通しており、笑話でありながら仏教説話の導入部として機能している。

また『雑談集』においては、「思」の多用が認められる。わずかに数行の中に九回も「思」という表現が用いられている。これらは登場人物の心情の動きを示すもので、説法という特別な場における「導師」や「聴聞ノ人々」の動揺ぶりを巧みに描き出している。

しかし、それだけではない。無住は「導師」と「尼」の間に「聴聞ノ人々」を置き、その思いを描くことで、笑話でありながら同時に仏教説話としての鮮度を失わないようにしているのである。中盤での「聴聞ノ人々」の思案から、終盤での欲深い「尼」の思わぬ発言によって劇的に罪が暴露され、それによって「導師」の恥意識を描き出すのである。この点で最後に「人々」は登場するが、基本的には「導師」と「尼」のやりとりに終始する『古今著聞集』とは根本的に違うのである。無住には不浄説法糾弾という大きな目的があり、それをわかり易く読者に説くために「聴聞ノ人々」を登場さ

せ第三者的思案を行った上で最後に落とすのである。これは先に述べた「聾」の寓話と同じ展開なのである。八百長説法に対する叙述にも、両者の相違は明確に表れている。「古今著聞集」が「人々はあとわらひけり」と笑い飛ばして終わるのに対し、「雑談集」では「サスガ人ナレバ身ヨリ火ヲイダス。諸人ノキ、ヲラドロカス。是即十悪ノイタス所也。能々慚愧シテ、念仏ヲ可レ唱云云」と話末評語を含め、無住は終始一貫して、言い換えれば予定通りにこの話を締め括っている。これらの相違は当然、両書が仏教説話集か否かという点に起因していることもあるのだが、無住の本文表現を明確にすることは、次に見る梵舜本の本文表現と比較するに当たって非常に重要になってくる。ここでとりあえず無住本文の特性についてまとめる。

無住本文は登場人物の性格、感覚、心情を重視した本文表現に特徴があり、それが仏教的主題とつながりを持つところは仏教説話集としての普遍的な在り方と一致する。そして特に重要なのは、無住本文には寓話Ⅱ笑話においても仏教的主題という中心的存在があり、仏教的主題をわかり易く説くために、「カホアカミ」や「思」を繰り返す手法等によって、自らの思想に読者を少しでも近づけようと試みているのである。第一の著作であり、完成後も精神的に改稿を行った『沙石集』と晩年の著作で自らの述懐も多い『雑談集』

とは、読者対象も同一ではなく無住自身の気持ちにも少しの変化はあったかもしれないが、仏教的思想を根底に置きながら描く本文表現を含めた、無住の描写態度に変わりはないのである。

三、梵舜本の本文表現

無住の表現態度に対して梵舜本独自説話の本文表現はどうであろうか。梵舜本独自説話はその多くが巻第六、第八に集中しているが、巻第八は御茶ノ水図書館蔵成實堂文庫旧蔵江戸初期本と共通した構成、内容を有している^⑦。この点に関しての考察は『沙石集』諸本全体の問題とも関わっているので、詳しくは別の機会に譲りたいが、いざれにしても諸本において梵舜本のみには伝わる説話とは言い切れない。現段階で完全な梵舜本独自説話が多く見られるのは巻第六にある説教師達の笑いを描いたものだけである。

そこで本稿では「人ノ聾」の寓話と同じく『直談因縁集』に類話を有し、『雑談集』と同じく説法での説教師の失敗談を描いた梵舜本巻第六（一三）「説法セズシテ布施取タル事」を取り上げてみたい。梵舜本巻第六の独自説話（群）と類話を有する他作品は極めて少なく^⑧、そういった意味で梵舜本独自説話の本文表現を探るに当たって「説法セズシテ布施取タル事」は一つの重要な判断基準となってくる。次にその本文を挙げた^⑨。

梵舜本『沙石集』巻第六(一三)「説法セズシテ布施取タル事」第一話

鎌倉ニ或尼公、逆修シケリ。説経ナムドモセヌ僧ナレドモ、モシ希望ノ心モアリ、色代ニ請用セヨトテ、「一座ノ供養シ給ナシヤ」ト、イハセケレバ、布施ノホシサニヤ、無左右領状シテケリ。思ハズニゾ檀那思ヒケル。サテ既ニ禮盤ニ登リテ、法用過テ、金打チ表白スベキニ、懷ヲサグルニ折紙ナシ。慥ニ懷中シツル物ヲト思ヒテ、サグレドモく大方ナカリケレバ、座席ノビケルマ、ニ、頭ヨリ煙リ立テ、芋ノ頭ヲユデタルニ似タリ。額ヨリ汗流レケレバ、檀那ノ禪尼、簾中ヨリ、「アノ御房、汗ヲタニ拭給ヘカシ」ト、イワレテ、彌臆シテ、頭ノ煙モ立マサリケリ。アマリニ時剋ノビケレバ、「アノ御坊、サラバヨリ給ヘ」トイワレテ禮盤ヨリ下テ、座ニツキケル袴ノモ、ダチヨリ、折紙ヲチテ、ヒカレテ風ニフカレケルヲ、クリ集テ座ニツキヌ。布施引トテ引ケレバ、布施取テ帰リス。人ニカ、セテ、如レ形ヨミツケタレバ、本ニ向テダニ、ハカくシカラズ。マシテソラニハ、一句モ可申モナクテ、布施計取テ出デヌ。恥ニハ人ハ死ヌ物ニテ侍リケリト、其座ニテ見タル人、物語侍リキ。

『直談因縁集』三一十七

一、不淨説法ト云付テ。鎌倉ニ、有者、逆修ヲ致スニ、諸僧、供養^ス。時^キ、同、説法ヲ聴聞^{セント}。時^{至ルニ}、一紙^ニ書引合テ出ル也。中座^{ニハ}、高座ヲ莊^リ、四方^ニ簾幕^ヲ懸^テ、懃^ニ聞^ク之^ヲ、耳傾。其外、聴衆、数多也。而、高座ニ上リ、説法^{セト}思^フ、是ヲ尋^ニ、不見之。時、アセヲナカシ迷惑。時、施主^カ説法ハ遲^クトモ、先、アセヲノコイ玉ヘ、ト云云。不説法。時^キ、旦那、不^ト説法^セ、高座ヲ下リ玉ヘ、ト云云。時、高座ヲ下リ。サレトモ、布施ヲ引取也。今時分説法^ハ、如此也。恥^ヲ不知。或^ハ布施ノ望、又^ハ人目斗^ニ説法ト云云。是不淨説法也云云。

現在、梵舜本独自説話「説法セズシテ布施取タル事」第一話は『直談因縁集』に類話を持つのみである。梵舜本独自説話「説法セズシテ布施取タル事」第二話も『直談因縁集』三卷三十五話のみに類話を有していることを併せ考えると、『直談因縁集』の編者が梵舜本「説法セズシテ布施取タル事」を何らかの形で見たということも考えられる。とすれば梵舜本巻第六の独自説話が天正十三(一五八五)年頃には完成していた可能性もあり、重要な示唆であると言える。

しかし一方で、十六世紀までにこういった説教の場での笑いが積

極的に筆録されるようになり、その一つの享受を示すものであるということも考えられる。

いずれにしても、ここで述べたいことは、梵舜本独自説話「説法セズシテ布施取タル事」第二話については、両者がほぼそのまま同文を載せているのに対し、梵舜本独自説話「説法セズシテ布施取タル事」第一話の本文表現については両者に相違が見られることである。現段階では、『直談因縁集』のような本文が先行し、それに梵舜本編者が増補したのか、梵舜本本文を見て『直談因縁集』編者が取捨選択したのか、については明確ではないが、『直談因縁集』に存在しない本文表現は梵舜本に特有の本文表現である可能性が高い。次に両者の本文表現の中で、梵舜本の本文特性を表すと考えられる箇所を見ていく。

描写観点から見て特徴的な本文表現は「頭ヨリ煙リ立テ、芋ノ頭ヲユデタルニ似タリ」や「頭ノ煙モ立マサリケリ」に代表されるような本文表現である。先の「人ノ聾」の寓話のように「カホアカ」めるといった常識的表現は用いず、頭から煙を立ててしまうのである。さらに、それが「芋ノ頭ヲユデタルニ似タリ」と描かれるのである。この点は間違いなく「笑い」というものを意識した表現態度なのである。『直談因縁集』と比して、梵舜本では「座ニツキケル榜ノモ、ダチヨリ、折紙ヲチテ、ヒカレテ風ニフカレケルヲ、ク

リ集テ座ニツキヌ」とオチが明確に詳細に描かれている点でも「笑い」に対する意識を感じ取ることができる。これらの本文は『直談因縁集』を見てもわかるように、話の展開からは存在しなくても良い表現なのである。一方でオチが暴露される尼公は最後まで悪びれた様子や反省の態度を見せたという記述は付加されない。「説法セズシテ布施取タル事」を単なる説法における失敗談Ⅱ「笑話」として見れば、完成度は非常に高く、まさに実際にこの説法を見ていたような者の筆致である。そういった意味では、無住ではないとした時の梵舜本改変者の表現力や現場の再現力といったものは無住に匹敵するものであると言える。この点については既に拙稿で少し触れた^⑩。しかしどの本文表現も『沙石集』にある無住の根底的思想とは一致しない。つまり無住らしさで言えば不浄説法糾弾のための譬喩が中心の主題になるはずである。それは『直談因縁集』がこの話を「不浄説法」と理解して『雑談集』と同じく数多くの「聴衆」にその「恥」を目撃させながら、「不浄説法」に合う部分のみを描写した上で「今時分説法、如此也。恥ヲモ不知。或ハ布施ノ望、又、人目斗ニ説法ト云云。是不浄説法也」と評していることから間違いない。『沙石集』巻第六に載る諸本共通説話や『雑談集』説話、『沙石集』草稿本と考えられる米沢本説話、もつと言えれば米沢本・梵舜本のみ

に伝わる共通説話でさえ、ここまで説話掲載の仏教的意図が判然と

しないものではなく、その点で卷第六や第八の梵舜本独自説話は極めて異質である。

梵舜本の話末には「恥二八人ハ死ヌ物ニテ侍リケリ」という評が「其座ニテ見タル人」を介して付加され、ここで初めて恥意識に焦点が当たれるが、それまでの描写態度とはちがはぬ感じが拭えない。或る尼公は大衆の面前で大失態を犯しておきながら平然と布施は取つていくのである。ここには布施に執着するあまりに地獄に堕ちたというような因果の理はもちろん、恥意識のかけらも見られない。恥意識が少しでもあることを描くのならば、平然と布施を取つていったままで話を結ぶようなことを無住はしないはずである。少なくとも説話から教理を補強するといった行為が見られるはずである。「説法セズシテ布施取タル事」第一話は仏道への勧誘というよりも「其座ニテ見タル人」が「物語」つてくれた「興ある話」を「笑話」として完成させようとする姿勢が強く見られる。そしてこの姿勢は卷第六や第八の梵舜本独自説話（第八は完全な独自ではないが）に共通した傾向と言えるのではないだろうか。話末の「恥二八人ハ死ヌ物ニテ侍リケリ」は梵舜本改変者が「説法セズシテ布施取タル事」増補時に無住を真似て付したのかもしれないが、「人ノ聲」の寓話や『雑談集』とは仏教的世界観が描かれていないという点で根本的に違うものになってしまっている。

以上から梵舜本独自説話の本文表現は無住のものとするにはどうしても無理がある。梵舜本独自説話の本文表現は仏教的価値観を根底に見据えた性格、感覚、心情表現よりも読者（聴衆）を話に引き込むための表面的な描写や構成に主眼がある。そして裏を返せば、梵舜本独自説話の面白さを引き出している要因の一つは仏教的な意識の低さにあると言え、その意識の低さが梵舜本独自説話の特性であり、笑話が代表的特徴として認められる梵舜本自体の特性でもある。

四、まとめ

以上、他作品を媒介として、無住本文と梵舜本文における本文表現の特性について考察を加えてきたが、無住の表現態度と梵舜本の表現態度とは大きな隔たりが存在している。無住は笑話を掲載する場合でも、それはあくまで「寓話」の域を出ず、本文表現についても仏教的価値観を忘れずに描こうとする姿勢が見て取れる。それに対して、梵舜本改変者（達）の笑話的要素に関心が高いあまり仏教的価値観を忘れてしまったか、あるいは最初からそれ程仏教的意識の高くない人物が無住の仏教的寓話に触発され、思わず笑話を増補してしまったか、というような改変過程が梵舜本の本文表現からは想像されるのである。その点で、やはり梵舜本は無住の『沙石

集」改稿本ではないと考える。

今後は、米沢本や梵舜本の本文表現比較や無住の笑話構造における例外の考察等を通して、この問題をさらに掘り下げていきたいと思っている。

注

- ① 渡邊綱也氏校注 日本古典文学大系『沙石集』（岩波書店、一九七六年）
- ② 土屋有里子氏「梵舜本『沙石集』考―増補本としての可能性―」（『中世文学』第五十号、二〇〇五年六月）
- ③ 小島孝之氏校注 新編日本古典文学全集『沙石集』（小学館、二〇〇一年）「古典への招待」
- ④ 拙稿「梵舜本『沙石集』の性格」（『同志社国文学』第六十五号、二〇〇六年十二月）
- ⑤ 『百句譬喻経』は『大正新脩大藏経』第四卷（大正一切経刊行会、一九二四年）を用いた。『沙石集』卷第三（二）における「人ノ罽」の寓話は梵舜本を含めた『沙石集』諸本にはほとんど異同が見られないので梵舜本本文である注①を用いた。『直談因縁集』は阿部泰郎氏、小林直樹氏、田中貴子氏、近本謙介氏、廣田哲通氏編著 日光天海蔵『直談因縁集 翻刻と索引』（和泉書院、一九九八年）を用いた。
- ⑥ 『古今著聞集』は永積安明氏、島田勇雄氏校注 日本古典文学大系『古今著聞集』（岩波書店、一九六六年）を用いた。『雑談集』は山田昭全氏、三木紀人氏校注 中世の文学『雑談集』（三弥井書店、一九七三年）を用いた。

梵舜本『沙石集』の本文表現と編者

⑦ 梵舜本巻第八と江戸初期本巻第八の構成や内容の共通性に関しては、土屋氏の「成實堂文庫蔵『沙石集』の紹介」（『国文学研究』第三百三十一集、二〇〇〇年六月）がある。

⑧ 現段階で梵舜本巻第六の独自説話と類話を有する他作品は『直談因縁集』に二話ある他に、『今物語』の巻末に類話と取れるものが一話見られる程度である。

⑨ 梵舜本は注①を用い、『直談因縁集』は注⑤のものを用いた。

⑩ 注④に同じ。

〔付記〕

本稿は、同志社大学国文学会 秋季研究発表会（平成十八年十一月十九日、同志社大学今出川キャンパス・寧静館）において発表した「梵舜本『沙石集』の性格―本文比較と笑話構造を端緒として―」をもとにして成ったものである。発表の席上、ご教示を賜った会員諸氏に御礼を申し上げます。